

加藤多津子・小幡 裕 (消化器病センター・消化器内科)

15. IL-2 で増殖したヒト末梢血単核細胞の表面マーカーとキラー活性

齋藤 博・押味 和夫・溝口 秀昭 (第1内科)

16. LAK 細胞の腎細胞癌培養細胞に対する細胞障害活性についての検討

海老原和正・東間 紘・林 智人・安尾美年子・中沢 速和・
阿岸 鉄三・太田 和夫 (腎臓病総合医療センター・腎臓外科)

4:05~4:35 押味 和夫 (第1内科)

17. 胃癌患者における Su-Ps 皮膚反応の有用性について

小川 智子・小川 健治・矢川 裕一・稲葉 俊三・梶原 哲郎 (第2病院・外科)

18. 新しいプリン誘導体 (Bredynine) の免疫調節作用

蓮沼 智子・鎌谷 直之・寺井 千尋・河井 和夫・
西岡久寿樹 (リウマチ痛風センター)

19. MDP およびその誘導体とサイトカインの併用による抗腫瘍性マクロファージの誘導

齋藤 慎二 (微生物)
済木 育夫・東 市郎 (北大・免疫科学研究所)

1. A 群レンサ球菌細胞壁 C-多糖体によるぶどう膜炎惹起実験

(第2病院・眼科)

砂田 昭信・渡辺千恵美・宮永 嘉隆

近年、ベーチェット病や原因不明のぶどう膜炎の原因の一つとして溶連菌の関与が示唆される報告がある。我々は数年来、細菌細胞壁構成成分の一つであるペプチドグリカン (PG) が興味ある実験的ぶどう膜炎を惹起するメカニズムについて研究を重ねて来た。今回、A 群レンサ球菌細胞壁から分離した C 多糖体が惹起するぶどう膜炎には免疫学的機作が関与するかを研究する目的で実験を行なった。A 群レンサ球菌全菌体 (死菌) をウサギに反復静注し、全身感作した後、硝子体に C 多糖体を注入し、炎症所見を肉眼的、病理学的に観察した。その結果、感作眼には非感作眼に比較し病理学的に強い炎症所見が認められた。したがって、ぶどう膜炎の原因の1つが溶連菌であるとする、その反復性、再発性には免疫学的機作が考えられ、菌特異の物質である C 多糖体はその要因の一つになるであろうことが示唆された。

2. HTLV-1 associated myelopathy の経験例について

(脳神経センター・神経内科)

伊藤 綾子・太田 宏平・柴垣 泰郎・
大澤美貴雄・内山真一郎・小林 逸郎・
竹宮 敏子・丸山 勝一

近年、HTLV-1 感染に伴う痙性対麻痺がひとつの疾患概念として提唱され話題になっている。当科で経験

した HTLV-1 associated myelopathy (HAM) の一例を報告する。

症例は鹿児島県出身の46歳男性。主訴は歩行障害。現病歴は昭和43年頃より、両下肢のつっぱり感、歩行困難が出現し、徐々に進行。昭和62年3月入院。既往歴、家族歴に特記所見なし。神経学的所見では、痙性対麻痺を認めた。検査所見は、末梢血の異型リンパ球5%、リンパ球亜分画で、IL-2 receptor 陽性細胞4.1%、HLA typing は A₂, A₂₄, BW₅₂, B₇, Cw₇, DR₁, DQw₁, 血清、髄液 ATLA は陽性、髄液中に ATL 様細胞を認め HAM と診断した。プレドニゾロン60mg 投与により、症状改善。同時に血清、髄液中の ATL 様細胞は消失し、IL-2 receptor 陽性細胞の減少を認めた。HAM に多い HLA ハプロタイプを持つことを考えあわせ、本例の発症に免疫学的機序の関与が示唆された。

3. Gold thioglucose 注射による肉芽腫が関係したと思われる遷延したインスリン自己免疫症候群の1例

(糖尿病センター・内科)

八尾 建史・内潟 安子・平田 幸正

インスリン自己免疫症候群は大量のインスリンに対する自己抗体の産生とそれによる自発性低血糖を特徴とする。症例は56歳女性。昭和52年9月より10カ月にわたり気管支喘息治療のため臀部に gold thioglucose の筋肉内注射を20回受けた。最後の注射より1年後、右臀部皮下に数個の硬結を触れるようになり、さらに1年後食後低血糖発作が出現してきた。発作の軽快を